



千葉白菊会会報

第60号

令和5年12月発行  
(2023)

発行 千葉大学医学部  
・千葉白菊会

〒260-8670  
千葉市中央区亥鼻1-8-1  
千葉大学医学部内  
TEL 043-226-2988

印刷 株式会社正文社  
〒260-0001  
千葉市中央区都町1-10-6  
TEL 043-233-2235

目次

成願者名簿 …………… 1

ご遺体の先生に寄せて …………… 3

医学部学生感謝のメッセージ

看護学部学生感謝のメッセージ

ご遺族様からのメッセージ …………… 15

白菊会活動報告 …………… 17

解剖実習ガイドンス

納棺式 献花式 白衣式

お知らせ …………… 18

白菊の広場 …………… 19

私と献体・会員からのお便り

Q & A …………… 21

ご家族の方々へ …………… 23



# 成願者名簿

令和四年四月一日から令和五年三月三十一日まで、八十九名の会員が成願じょうがんされました。謹んで追悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

(注) 千葉大学に献体(成願)された年月日を記載しています(ご逝去された日ではありません)。

故	竹村 嘉津代 様	柏市	97歳
故	令和四年四月二十二日		
故	荒木 啓二 様	鴨川市	73歳
故	令和四年四月二十五日		
故	山崎 ハツノ 様	流山市	94歳
故	令和四年五月二日		
故	須永 敬三 様	木更津市	78歳
故	令和四年五月六日		
故	岩堀 桂子 様	千葉市若葉区	88歳
故	令和四年五月十四日		
故	加藤 隆枝 様	千葉市中央区	73歳
故	令和四年五月十八日		
故	幸野 ミチエ 様	市原市	88歳
故	令和四年五月二十日		
故	平林 忠 様	千葉市美浜区	85歳
故	令和四年五月二十三日		
故	横山 知代 様	千葉市緑区	87歳
故	令和四年五月二十四日		
故	天野 隆司 様	船橋市	95歳
故	令和四年五月二十四日		
故	三沢 信六 様	佐倉市	90歳
故	矢口 タミ 様	八千代市	85歳
故	令和四年五月二十七日		
故	森 レイ子 様	富里市	77歳
故	令和四年五月二十九日		
故	オカ リヨウジ 様	習志野市	85歳
故	令和四年六月一日		
故	東平 たけ 様	千葉市稲毛区	96歳
故	令和四年六月二日		
故	山崎 二三枝 様	千葉市中央区	99歳
故	令和四年六月三日		
故	船橋 光雄 様	千葉市若葉区	74歳
故	令和四年六月十一日		
故	清水 快 様	千葉市中央区	77歳
故	令和四年六月十三日		
故	石丸 喜八郎 様	習志野市	90歳
故	令和四年六月十六日		
故	三倉 加壽 様	千葉市中央区	98歳
故	令和四年六月二十二日		
故	市毛 基子 様	千葉市美浜区	77歳
故	令和四年六月二十三日		
故	橋本 義富 様	船橋市	83歳
故	令和四年六月三十日		
故	高見 美津 様	千葉市花見川区	95歳
故	令和四年七月三日		
故	長谷川 眞子 様	市川市	88歳
故	令和四年七月六日		
故	眞田 陽子 様	南房総市	81歳
故	令和四年七月六日		
故	西宮 きみ 様	鴨川市	107歳
故	令和四年七月十四日		
故	桑島 輝 様	市川市	91歳
故	令和四年七月十八日		
故	長島 祐夫 様	印西市	94歳
故	令和四年七月十八日		
故	鈴木 末吉 様	千葉市中央区	99歳
故	令和四年七月十八日		
故	高橋 方子 様	柏市	100歳
故	令和四年七月二十一日		
故	高橋 郁夫 様	千葉市稲毛区	81歳
故	令和四年七月二十二日		
故	田村 ハナ子 様	千葉市稲毛区	89歳
故	令和四年七月二十三日		
故	竹内 初江 様	成田市	87歳
故	令和四年七月二十八日		
故	佐藤 匡秀 様	市川市	85歳
故	令和四年八月四日		
故	小田原 福美 様	千葉市若葉区	95歳
故	令和四年八月七日		
故	小泉 昌子 様	旭市	96歳
故	令和四年八月八日		
故	石川 緒子 様	夷隅郡御宿町	88歳
故	令和四年八月二十二日		
故	三田 豊代子 様	野田市	77歳
故	令和四年八月二十四日		
故	黒岩 君枝 様	千葉市稲毛区	74歳
故	令和四年九月一日		
故	塩崎 世津美 様	茂原市	86歳
故	令和四年九月四日		
故	佐藤 日出人 様	鎌ヶ谷市	91歳
故	令和四年九月十日		
故	飯島 耕造 様	千葉市花見川区	
故	令和四年九月十三日		

成願者名簿

故	細野 梅吉 様	習志野市	79 歳
故	金田 幸子 様	千葉県緑区	82 歳
故	江野澤 久恵 様	習志野市	88 歳
故	松原 まさ 様	千葉県稲毛区	96 歳
故	岡田 勝次 様	四街道市	80 歳
故	平野 政子 様	八街市	82 歳
故	関 功 様	東京都	77 歳
故	安田 きく子 様	船橋市	96 歳
故	志満 武 様	白井市	83 歳
故	倉内 ヨネ子 様	木更津市	85 歳
故	小名木 元子 様	千葉県中央区	73 歳
故	稲村 久美子 様	茂原市	81 歳
故	後藤 昌三 様	東金市	82 歳
故	坂本 はるよ 様	茨城県	101 歳
故	三橋 進 様	千葉県美浜区	76 歳
故	寶澤 義雄 様	館山市	88 歳
故	阿部倉 昭夫 様	東金市	95 歳
故	板橋 ミヨカ 様	船橋市	82 歳
故	齋藤 ふみ江 様	大網白里市	73 歳
故	志賀 鐵雄 様	柏市	84 歳
故	宮城 總子 様	いすみ市	88 歳
故	小林 ノリ 様	千葉県美浜区	87 歳
故	吉田 良子 様	袖ヶ浦市	86 歳
故	兼光 富明 様	柏市	84 歳
故	高橋 廣司 様	千葉県美浜区	88 歳
故	三橋 昭十 様	千葉県若葉区	87 歳
故	嶋村 備己 様	流山市	92 歳
故	下田 盛恭 様	千葉県中央区	95 歳
故	大石 みつ 様	千葉県若葉区	92 歳
故	並木 薫 様	八街市	97 歳
故	松本 恒 様	千葉県中央区	92 歳
故	岡 弘之 様	松戸市	85 歳
故	白井 徳子 様	船橋市	96 歳
故	大多和 勇 様	千葉県若葉区	85 歳
故	石田 佳子 様	東京都	92 歳
故	氏家 勢子 様	船橋市	92 歳
故	古厩 泰彦 様	千葉県中央区	65 歳
故	鈴木 サヨ子 様	夷隅郡大多喜町	93 歳
故	鈴木 俊子 様	松戸市	87 歳
故	高梨 百合子 様	千葉県若葉区	96 歳
故	伊澤 千代 様	我孫子市	89 歳
故	松田 健三郎 様	東京都	91 歳
故	大澤 キエ 様	茂原市	85 歳
故	山田 龍昭 様	千葉県緑区	94 歳
故	東 泰三 様	勝浦市	90 歳
故	柳田 信一 様	勝浦市	77 歳
故	佐藤 つや子 様	いすみ市	91 歳

## ご遺体の先生に寄せて

解剖実習を行った医学部学生、見学に参加した看護学部学生たちからのメッセージをお届けします。皆、この授業を通じて真の医学生・看護学生となり、そして良き医師・看護師となる決意と、献体者への感謝を表明しています。

## 医学部学生感謝のメッセージ

## 託された使命

神谷 直樹

「献体の精神に感謝して、黙祷」

毎回の実習は、この言葉から始まる。私はこの言葉を聞いたたびに、「献体の精神」とは何なのだろうか、と考えていた。

実習が始まる前、私は医学部の象徴的な授業の一つであり、医師になるための登竜門である解剖実習がこれから始まることに胸を踊らせていた。しかし、実習室に足を踏み入れると抱いていた高揚感は消え、張り詰めた緊張に襲われた。当然、解剖実習はご遺体の方にメスを入れ

させていただく、決して軽い気持ちで行ってよい事ではないことは頭では理解しているつもりであった。しかし、ご遺体の先生を前に席に着くと、頭ではなく身体と心が、解剖実習の持つ意味の重さを感じる。担当教員の方々からは、ご遺体の方は我々の先生であり、そして初めての患者であると説明を受けた。

解剖実習は、ご遺体の先生との対話と言われることがある。私も先生に想いを馳せながら、実習を進めていった。先生は何を思っご遺体いただいたのだろうか。抵抗感がある方も多いだろう。ご家族の反対もあったかもしれない。それでもご遺体いただいたのには、恐らく我々医学部生に対する、あるいは未来の医療に対する強い思いがあり、それが「献体の精神」なのだろう。だからこそ、我々はその「献体の精神」を汲み取り、それに応える責任がある。では、先生は我々に何を伝えたいのだろうか。その答えは知ることができないが、私は確かに先生から多くを教えていただくことができた。先生から教えていただいたことは解剖学の知識だけでは無い。解剖実習では、ご遺体の先生は患者さんでもあり、患者さんの前ではならないことは先生の前でもしてはならず、常に敬意を持って接することとなる。その経験を通じて、

医師としてあるべき心構えや姿勢を教えていただいた。そして、実習最終日には命の重さを教えていただいた。

長かったはずの実習は、あつという間に終わってしまった。これまで3ヶ月間に多くのことを教えていただいた先生は、棺を閉めてしまえばもうお会いすることはできない。私は途方もない喪失感を覚えた。先生は、最初からお亡くなりになっていたが、実習中、私の中ではずっと生きて語りかけてくださっているように感じていた。棺を閉める時、その別れは私にとって非常に辛いものであった。

最後の黙祷を捧げながら、脳裏には実習中の記憶が蘇る。初日、震える手で初めて持つメス。事前の教科書での予習と異なる形態への驚き。実習を経て知識と実際の様子が次々と結びつく喜び。私は先生に教えていただけること全てを学ぶことができたのだろうか。ご遺体いただいた先生の期待に応えることができたのだろうか。そしてその時、私は先生の期待に報いなければならぬという強い使命感を抱いていた。

先生、私は必ず先生から教えていただいたことを忘れず、社会に貢献する立派な医師になります。このような極めて貴重な学習の機会をいただき、誠にありがとうございました。

## 解剖学の授業を終えて

谷口 まにす

はじめて実習を迎えた日、なんとも言えない緊張感に包まれてご遺体の先生と対面したことを未だに鮮明に覚えている。まだ座学でしか学習したことがなく、医学生としての自覚も薄かった私にとって、一人の人にこんなにも間近で触れ、関わることは初めての経験だった。

授業の最初にそつと白布を捲り、先生のお顔を拝見すると、とても安らかで穏やかな表情をしていて、それでいてただ眠っているのとは違う空気を纏っていることがはつきりと感じられ、これが亡くなられているという状態なのだ改めて認識した。生きている私と、もう亡くなられている目の前の先生とでは何が違うのだろうか。先生は最期まで闘い抜いたことが想像できないほど小柄でか細く、触れると壊れてしまいそうで少し怖いような気持ちになったことを覚えている。恐る恐る抱えた時、思いのほか重さがあった。その重みにどきりとした。これから勉強させていたただくのが、確かに生きていた方であるのだという事実が、抱える腕に重くのしかかってきた。

実際に解剖学の実習が始まると、回数

を重ねるごとに解剖学的な知識も増えていったが、それ以上に対峙しているご遺体の先生について知りたいという気持ちが強くなった。

どうして献体をしようと思ったのか。生前、先生は何を思い、考えて生きていたのか。どのような最期を迎えられて私たちの目の前に来たのか。名前も家族構成も既往歴も、環境も知らない。訊いても言葉が返ってくることはない。それでも少しでも知りたいと思った。直接言葉を聞くことはできない患者さんではあるけれど、体に刻み込まれた生の痕跡を探すほど、先生が生きていたのだということ。を噛み締めて、少しでも近づけたような気がした。

そして、そのように、名前も素性もきちんとした病歴すら知らない先生を識ろうと向き合う時の私こそ、以前とは違っていた。確かに医師になる自覚の芽生え始めた医学生だったのではないだろうか。たとえ生きてコミュニケーションを取ることがなくても、このような機会がなければ接することができなかった方の人生の最期に関わらせていただいたことは、非常に貴重で重要な体験だと思う。

授業の最後の納棺式を前に、医師になり患者さんや同僚と接するにあたって必要な「共感」という考え方について教授

からお話があった。同調とは違い、自他が違くと認識し線引きした上で相手の主張を認め、尊重すること。どうしてそう考え、振る舞ったのか、その背景を理解すること。実習の3ヶ月間を通して、声はなくとも体そのものから先生の人生を識ろうとしたことも、そう言ったことではないだろうか。

この解剖学の授業を通して、実際にご遺体の先生のご協力なくては学ぶことができなかったことは勿論、知識面・学術面において山ほどある。立体視して触れて初めてわかる人体の構造、実際の構造はひとつも教科書通りでなく一人ひとり違うこと。しかし、それ以上に、一人の患者さんに人間として、人生の一部に関わらせていただくということについて、きちんと実感と重みを伴って捉える大きな基盤になったように感じる。まだまだ未熟でうまく噛み砕けていないことも多いけれど、感じたことは忘れてはいけな

いと強く思った。ここまで感じたことを一言で括ってしまうと陳腐な言葉にはなってしまうのですが、本当に本当に、ありがとうございます。ご指導くださった教員の方々、ご遺体を託してくださいましたご遺族の方々、献体してくださり私達の勉強に付き合ってくださいましたご遺体の先生に、

心より感謝申し上げます。

## 解剖実習を終えて

横田 み空

まず初めに献体してくださった先生方、及びそのご家族の方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございます。皆様のおかげで無事に解剖実習を終了することができました。私自身、この実習を通して医学を志すものとして大切な多くのことを学ぶことができ、成長できたと感じています。

初めて解剖室でご遺体の先生に黙祷を捧げた時のことを今も鮮明に覚えています。今までの大学生活では味わったことのない緊張感が漂う空間。そして、その空間の中でこれから解剖実習が始まるのだということを実感する学生達。真剣にご遺体の先生と向き合い解剖し、学ばせて頂くこうと強く覚悟を決めました。それから3ヶ月間にわたる解剖実習は私にとって驚きと感動の連続でした。

この解剖実習は、私が医師への道を志し大学に入学してから初めて本物の人と向き合う機会であり、ご遺体の先生は私にとっての初めての患者さんでした。また、実際の医療現場にふさわしい服装を

身につけ、メスなどの様々な器具を扱うのも初めての経験であり、実習を通して医療現場に近い環境を経験できることへの喜びを感じると共に、自分が医学生であることの自覚を改めて持つことができました。また、今まで教科書でしか見たことのなかった人体の構造を自分の目と手で実際に確認することができ、とても感動しました。実際に解剖してみると、教科書に載っているような位置を探している構造物がないことや、大きさや形も人によって様々であることがわかり、人体というのは教科書通りではないのだということも改めて感じました。このことは実習なしでは得られなかった気づきであり、本当に解剖実習は私達学生にとって有益な経験であったと思います。

そして、全ての解剖実習を終えて迎えた納棺式の日、私達はご遺体の先生方に献花をさせて頂きました。その時、献体して下さった先生は私達学生の元から離れて、ようやくご家族の元に帰られたのだと感じました。本来ならばすぐにご家族のもとに帰ることができるとは思いませんでした。ご遺体の先生方が、医学の未来のために私達の先生になって下さったことに対する感謝の先生が、医学の未来のために私達の先生になって下さったことに対する感謝で胸がいっぱいになりました。そして、ご献体して下さった先生方やそのご家族の想いに応えられるように必ず立

派な医師になろうと心に誓いました。

最後に、私達医学生の学び、医学の発展のために献体することを決断して下さった先生方、そして先生方の意思を受け入れ献体に同意して下さったご家族の皆様は改めて感謝申し上げます。この解剖実習を通して得られた経験を必ず活かし、解剖実習を支えて下さった皆様への感謝の気持ちを忘れることなく、これからも医学生として日々精進していきたいと思えます。

## ご遺体の先生への感謝と今後の抱負

鈴木 香晶

3ヶ月の解剖実習を終え、今振り返ると、医学部の学生であるこの時期に、ご遺体の先生を解剖させていただくという機会を頂けたことは非常に大きな意義があったと痛感しております。ご遺体を解剖するという経験を通し、私は、人体の正常構造や機能について理解を深められたのもちろんのこと、医師になるということが決して一人で達成しうるのではなく、多くの方のご協力・献身の精神のもとに初めて達成可能なことであるの

だということも、改めて再認識いたしました。

10月の初週、初めての解剖の授業で拝見した動画の中で、死後献体された看護師の方が、「死んでなお、人様の役に立てるなら、これに勝る幸せはない」とおっしゃられていたのが非常に印象に残っています。生前のみならず、死後に至っても、自身の火葬を遅らせてまで人の役に立つ道を選ぶという徹底した献身の精神に衝撃を受け、このような精神をお持ちの方と対面するのだと身が引き締まる思いました。献体へのご意思を固められた白菊会の方々もきつと、動画中の看護師の方と同じように、尊い献身・利他の精神の下、献体という選択をされ、そのおかげで自分は医師になることができるのだと強く実感しました。

このように、多くの方の尊い精神の下に医師にさせていただく自分は、そのご恩にどう報いていくべきなのか。解剖実習を前に私が出した結論は、自分自身もご献体された方々と同じく、利他的・献身的に社会に尽くし、多くの人の役に立つ医師になるということでした。

以降、3ヶ月の実習期間、自分なりに、ご遺体の先生と真摯に向き合い、献体の精神を無駄にしないよう、集中して実習に臨み、多くの知識・理解を得ることが

できました。この実習で得られた知識・理解は、今後すべての医療知識を学んでいくにあたり根幹となる本場に重要なものであったと思います。

今後は、医学部の学生として学んでいる間はもちろんのこと、医師になってからも、自分の医学知識の大本がご遺体の先生のおかげで身についたものであることを強く認識し、その方々の期待を裏切らないよう、日々、社会のため、患者さんのために医療を提供できる医師になれるように精進していこうと思います。

最後になりましたが、ご献体いただいたご遺体の先生はもちろんのこと、献体に同意してくださったご遺族の方々、献体に関する事務処理や啓発活動に日々ご尽力いただいている白菊会の皆様、献体にかかわったすべての方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

### 貴重な経験をくださった故人の先生方に感謝

安田 圭一朗

肉眼解剖学実習を終えるにあたり、本日ご遺体を納棺させていただきました。お世話になったご遺体の先生方にどうか安らかに眠っていただけるよう、心を込

めて棺に納めさせていただきます。まずは、ご献体くださいました故人の先生方ならびにご遺族の皆様方に深く感謝いたしますとともに、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

私にとって、実習は毎日が驚きでした。初めて見る身体の内部は、臓器や神経、血管などが入り組んだ思いのほか複雑な構造でした。そうした立体構造や位置関係を平面に描かれた図から読み取ることが難しく、ご遺体で実物を観察できたことは理解の大きな助けになりました。肉眼解剖学の先生方が熱心にご指導くださったこともあり、解剖学的な構造を発生の過程や生理機能と関連づけて理解を深めることもできました。振り返ると本当にたくさんの方の知識を生きた形で身につけることができました。

一方で、ご遺体の先生方は、知識とは異なる、直接人と触れることによる心身の経験をたくさん授けてくださりました。初めてメスを持ったときに感じた身の引き締まるような感覚は、責任感や恐怖心などの入り混じった、単なる緊張感とはまるで違うものでした。摘出した臓器を手にとったときに感じたずっしりとした重みは、強さと脆さを兼ね備えた生命の尊さを感じさせてくれました。ご遺体の先生ごとに微妙に異なる血管や神経

の走行を丁寧に通ると、先生の個性が感じられるような気がしてなりませんでした。そうした一つ一つの「生きている証」から生前に想いを馳せると、ご献体くださった本当に貴いご遺志に感動せずにはいられませんでした。

医師の感覚は一般的な感覚とはかけ離れている、と言われることがあります。というのも、医師は患者さんを救いたいという熱い心を持ち、患者さんに親身であらうと努める一方、命を扱うというその責任の重さゆえに常に理性的かつ客観的な分析が必要であり、しばしば苦しみや感情に無頓着にならざるを得ないからです。私は今回の実習でこのような板挟みに初めて直面することになりました。様々な構造や臓器の同定に夢中になっていくとき、果たして自分はご遺体を人ではなく物のように見てしまっているのではないかと。できるだけ全ての構造を同定し、その経験を将来に活かしてこそ故人の遺志に込められるには違いないのですが、同定されたもの一つ一つが「生きている証」だからこそ、それは本当に心苦しいことでした。無事に実習の全ての過程を終え、未熟ながらもこの板挟みを自覚できた今、私は医師への覚悟の第一歩を踏み出したような気がします。生涯にわたって知識を吸収し続け、豊

富な経験を持ち、優れた技能を持つこと。人間の尊厳を尊重し、誠実であること。他者を理解し、お互いの立場を尊重できる余裕があること。そして何より、人間に興味があること。故人の先生方やご家族の尊い想いを引き継ぎ、必ずや立派な医師になることを誓いつつ、棺に花束をお供えさせていただきました。最後に改めて故人の先生方とご遺族の皆様方に御礼申し上げ、感謝の言葉とさせていただきます。

### 感謝のことば

蔵田 光太郎

いよいよやって来る解剖実習の前に実習書などの準備を進めていた二年生の夏休みの終わり頃の私は、初めて大学の門をくぐってから一年半が経とうとしているのにも関わらず、未だに医学部に入つたという明確な実感を持ち合わせてはいなかった。それまで既に多くの授業を履修してきたが、それらの殆どが座学であったことなどから、恥ずかしながら医師になるという自覚どころか医学生でなかったという自覚すらも持てていなかったと記憶している。しかし、長いよ

うで短かった3ヶ月弱の解剖学実習を通して、そのような意識は大きく変化したと明言できる。

初めて解剖実習室に入ったときのことを鮮明に覚えている。涼しく保たれた部屋の冷気がひんやりと肌を包み、三十体あまりの献体してくださった先生方が白布に覆われて安置されていた。実習室に入ったのち教員から解剖手順に関して説明があったが、意識はそちらではなく完全に白布に包まれたご遺体の先生の方に向いていた。たった一枚の布を介した先にご遺体の先生がいらつしやるということ。そして、これからその先生にメスを入れていくこと。ついこの間まで普通の大学生と何ら変わらない日常を送っていた私にとって、その事実だけでも医学生としての自覚が芽生えるには十分すぎるものであった。

それからの3ヶ月間の解剖実習は、人体の神秘を身を以て知ることのできる貴重な日々の連続であった。教科書に描かれた二次元構造だけではわからなかった内部構造を、ご遺体の先生方が三次元構造に変換して教えてくださった。実際にはもっと細いと思っていた血管の想像以上の太さに驚くこともあれば、複雑に走行する神経を目に人体の複雑性に思いを馳せることもあった。全二十八回の解剖実習は一回一回が生命の尊さを感じる貴



重な体験であり、戻りたくても戻ることのできない唯一無二の時間であったと感じている。

さて、一連の解剖実習や試験を無事に終え、3ヶ月間の実習を温かく見守ってくださったご遺体の先生方への感謝の気持ちを抱きながら献花を終えた今の私たちであるが、それでもなお真の意味での解剖実習が終わったとは言えないのかもしれない。そもそも献体の精神とは「自らの遺体を無条件・無報酬で提供することによって、学識・人格ともに優れた医師を養成するための支えとなり、次の世代の人達のために役立とうとすること」というものである。つまるところ、私たちが3ヶ月間真剣に向き合ってきたご遺体の先生方は、ともするとそのご家族の反対を押し切つてでも、私たちが力量の高い医師になるという強い期待・希望などの想いをもって献体をしてくださったというのを忘れてはならない。肉眼解剖学という一つの科目を修めた私たちであるが、これはあくまでもスタート地点に過ぎず、これから先も続いていく長い医学生・医師としての人生の中で、今回の実習で得た解剖学に基づく深い知見を礎に正しい医師としての在り方を模索していく日々が始まる。これから先、多くの患者さんと共に未知の疾患と戦ってい

く険しい道のりが待ち構えているかもしれないが、その時には私たちの初めての患者さんであるご遺体の先生方が、戦友となつて私たちをリードしてくださるのではないかと信じている。

改めて、献体してくださった先生方やご家族の方、丁寧に指導してくださった教員の先生方、そして解剖学を共に学んだ友人に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

### 肉眼解剖実習を終えて

辺見 咲紀

「社会への恩返し 次世代への贈り物」という千葉白菊会の精神に共感し、ご協力くださった皆様のおかげで肉眼解剖実習を修めることができました。生前白菊会に登録しご献体くださった先生と、先生のご遺志に添つて献体することをご承諾くださったご家族の方々に深く感謝いたします。ご献体されますと、ご遺骨としてご家族のもとへ戻られるのは2〜3年後と伺っております。ご遺骨を納め落ち着いてお申いすることが出来るまでにお時間がかかってしまうという落ち着かなさや、見知らぬ学生に解剖されることへの不安を抱きつつの方もいらっしゃる

かと推測いたしますが、解剖実習における先生となることにご同意くださりありがとうございます。

実習はおひとりのご遺体に対し、学生4人が一組となつて進みました。「解剖させていただくご遺体の方は実習における先生であり、皆さんにとつて最初の患者さんでもあり、実習はチーム医療実践の第一歩である」と教員の先生は繰り返しおっしゃり、そのことを心に留めて臨みました。組の者と協力しながら、ご遺体の先生の解剖と観察を通して学ぶ3ヶ月でした。

アトラス※を見れば人体の構造が記載されています。しかし、皮膚や結合組織の厚さや動静脈や神経の見え方は、実際にご遺体に触れることからしか学ぶことのできない事柄でした。また、人体の構造は皆完全に一致している訳ではなく、個性や破格があることを体感して学ぶことができました。大腸起始部の盲腸に対する位置のバリエーションが豊富な虫垂を探したり、アトラスを参照しながら血管を剖出しようとしても見つからず教員の先生にも確認していただいて、アトラスとは異なる走行をお持ちであることを知つたりしました。

この実習は将来の見据え方にも影響を与えました。大学に入学し基礎医学を学

んで生命現象の仕組みに驚嘆することはあっても、そのうち患者さんを診るようになるということはあまり考えず、医師という職業に対する見方は大学入学前に抱いていた憧れと大差ないものでした。肉眼解剖学の講義と実習を通して、臨床現場を交えたお話を聞きご遺体という患者さんを診たことで、今ある道を着実に進むことができれば確かに医師になることを実感しました。そして、その道を進む覚悟を決めました。この決意を忘れず、この決意のきつかけをくださり、なにより私たちが担うであろう未来の医療に期待をかけてお体を提供してくださった最初の患者さんに恥じぬ医師になるために、これからも精進してまいります。

※アトラス……解剖実習で使用する人体の図譜

## ご遺体の先生方への感謝

遠藤 嵩也

初めて献体について知ったのは遙か前のことで、母との会話がきっかけでした。「母さん、死んだら献体するかもしれないけど、いいよね?」。目の前にある母の身体を見知らぬ誰かに提供するという

ことがどこか嫌なことに感じましたし、そんなことをしたところで本当に意味があるのかと考えていました。また、医学生として解剖をさせていただく身となっても、(ご)献体くださった先生方に対して失礼な話ではありませんが) 遺体を見たことの無い私にとって人の身体を開く行為そのものへの怖さ、解剖が上手く行って医者になることが出来るのだろうかという不安で頭の中が一杯でした。正直に言うて出来ればやりたくない、解剖でなくても人体の構造を学ぶことは出来るのではないかと、解剖が始まる前は考えていました。

しかし、解剖実習を終えてみると学びの連続でした。人体を模写した教科書はもちろん解剖の助けとなる素晴らしいものですが、実際にご遺体と見比べると教科書通りでないことや勘違いが沢山あり、人体がいかに複雑なものかを知らされました。また、ご遺体の先生方に個人差や病歴による臓器の欠損があったように人体の構造は全ての人が同じだということはもちろん無く、患者さん一人一人に向き合うことの大切さも学びました。生きた体で話すことは叶いませんでしたが、解剖という対話を通してご遺体の先生方にはそうした沢山のことを教えていただきました。さらに、こうした学びの

機会にご遺体の先生方やそのご家族方、白菊会の方など、献体に協力してくださった多くの方々が提供してくださったということからも、医学とは医学の発展を願う患者さん達の厚意の上に成り立っているだけに必ず報いなければいけないのだという医者としての自覚が身に付いたと思っております。

医学生にとって解剖は医学部として避けては通れない壁のように思えることもあるかもしれませんが。しかし、人の身体に関する知識、医者としての自覚は解剖実習を終えられたからこそ得られたと強く感じました。また、献体を検討されている方やそのご家族にとっても献体とは自分や自分の大切な人の身体を見知らぬ誰かの手によって開かれるという恐ろしいことと思われているかもしれません。あくまで献体されるかどうかの選択に対して私達が介入することは出来ませんが、私達が解剖で得られたそうした学びを通して世の中に貢献することで献体が医学にとってどれだけ大切なことを伝えられるよう、これからも勉強に励んでまいります。

最後にこのような学びの場を与えてくださったご遺体の先生とご遺族、そして白菊会の皆様に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 解剖実習を終えて

向坊 颯

まず、解剖実習を終えるにあたり、ご献体くださった先生方、並びに、ご家族にこの場をお借りして、心より深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

およそ3ヶ月に渡り、肉眼解剖学の授業及び実習を行って参りましたが、ここで学んだことは、肉眼解剖学という医学の一分野に留まるものではなかったように思います。肉眼解剖学で学んだことは、第一に、人の体の構造や機能について実際に目で見たり触ったりすることで実体験として学ばせて頂いたことだと考えています。実習の際には、教科書や参考書などを用いて器官や構造などを確認し、頭に入れた状態で臨んでおりました。しかし、実際に解剖を行っていく中で、教科書とは異なる位置に器官があったり、あるはずの器官がすでに摘出されていたりと、人の体は常に教科書通りである訳ではないと認識することができました。そのような個人の差を確認しながら班員と共に実際に手を動かしながら確認することでの人の体の構造についてより深く学ぶことができたと考えております。

第二に、医療人として肉眼解剖学をき

ちんと理解することの重要性について学ばせていただきました。私の大学では、授業の解剖学と実際の臨床現場とをリンクするカリキュラムが組まれており、実際に外科などの臨床現場で働いておられる医師の教員が講義をしてくださったり、気管切開や気管挿管などの実習ができる環境が整っていました。医師の教員は「解剖学は手術をする時に非常に重要で、どこにどのような構造物が出てくるのかを理解していないと、逆に傷つけてしまう可能性がある。」と全ての方が仰っていました。また、気管挿管などの実習では、実際に自分の頭の中に器官を想像しながら行いました。ここで初めて解剖学を理解していなければ、適切な処置が行えないと痛感しました。教員の先生は「次にやるときは実際の患者さんが相手になるでしょう。」と仰っており、実際に自分が処置を行わなければならない状況が必ずあると理解でき、自分が医療人になると自覚したことを鮮明に覚えています。解剖学で学んだことが医師として患者さんの治療にあたる際に、極めて重要なことであると実体験をもって理解することができました。

第三に、解剖学を通じて、自分は医療人になるのだという自覚と責任感を持ちました。特に、患者さんに向き合う姿勢

について非常に考えさせられました。解剖実習が始まる日に、教員の先生方から、「ご献体くださった先生方は、皆さんの最初の患者さんです。」と言われ、非常に緊張したことを今でも覚えております。患者さんに対し、誠実に向き合うことを強く心に刻みました。また、解剖の全てを自分だけでできた訳ではなく、教員の先生方の助力や、班員で協力があったからこそ達成できたことであると考えています。加えて、自分ができていなかった領域に関しては丁寧な教えてもらったり、逆に班員ができていなかった領域については自分の理解を深めると同時にわかりやすく解説できるように努め、決して一人で全てをこなせる訳ではなく、班員と協力することが非常に重要であると改めて理解することができました。このように、班員と協力することは、将来、患者さんを治すチームの一員として従事する際に必要な能力を養えたと感じております。肉眼解剖学実習を通じ、人の体を理解するという知識面だけでなく、医療人としての心構えを理解できたことで医療人として覚悟を持って医療に従事しようと固く決心しました。

ご献体くださった先生方の想いに背くことがないように、より一層邁進いたします。改めてありがとうございました。

## 看護学部学生感謝のメッセージ

## 道しるべ

岡田 扇奈

ご遺体の先生方、そのご家族の方々、白菊会の方々、先生方、今回はこのような貴重な機会を設けてくださりありがとうございます。ありがとうございました。多くの学びや気づき、初めて持った感情があり、この経験をしなければ得られなかったものだと思います。

解剖実習前、私は本物の臓器が見られるという期待と興味を持っていました。どちらかと言えば軽い気持ちだったと思います。しかし実習前に、献体するまでには多くの手順があり、それだけでなくご本人やご家族その他大勢の人の希望や苦悩、葛藤もあり、それら乗り越えて私たちが将来のために献体されるということを知りました。ここで自分の浅はかさに気が付きました。本物の臓器を見ることが目的ではなく、その時持った感情や、目にしたことから何が考えられるかを意識し、それらを専門職になった際も持ち続けなければいけないのだと。献体

に関わってくださった多くの皆様の思いを無駄にすることの無いよう、目の前の教えを目と心に焼き付けようという使命感のような思いがこみ上げてきました。

ご遺体の先生方に初めて対面したとき、目を離すことができませんでした。そこには何かを教え諭してくださるようなオーラがあったように思います。感謝・実習への決意を込めて黙とうをしました。そして四人のご遺体の先生方に多くのことを学ばせていただきました。教科書では知るのに限度があった器官の位置、漿膜※の手触り、臓器の角度、神経や血管の通り方。先生方によって違う厚さ、臓器の色や形状・有無。どれも感動する発見ばかりで、瞬きするのも惜しいくらい夢中で観察しました。そこから、分かる範囲での先生方の生前の病気、生き方を聞き、改めて一個人としての尊厳存在であることを認識し、ご厚意への感謝の念が湧いてきました。

特に印象に残っているのは、筋肉の重なり方や神経の通る場所です。この実習がなければ知りませんでした。観察・ご説明から、呼吸音を聞く際の聴診器の位置や静脈注射をするポイント、体位変換が必要なことなどに根拠を持つことができました。目で見たこと以上に、そこから応用できる思考にも多くの気づきを得

ることができました。そのとき先生の身体は生きていると感じられました。見学の最後に、感謝・臨床とそこまでの道のりへの決意を込めて黙とうをしました。

私たちの学びの先生方に恩返しをするという考えも分かります。ですが私は、学びの先生方への恩を「忘れず」、実際には将来関わっていく人々に献身という形で恩を返していきたいです。次に関わっていく人々に、もらった恩を思いやりや優しさで渡す、受け取った人も次の人に……というようにつながっていけば素敵だと思えます。その道しるべを作ってくださいしたのは今回の実習を成り立たせてくださった全ての方々です。私たちの将来のために大きなご決断、ご協力をしてくださったこと、心から感謝いたします。最後の黙とうの際の気持ちを忘れず、恩を返していける保健師となるために励んで参ります。

※漿膜……体腔の内面や内臓の表面を覆う薄い膜



## 先生から学び、考えたこと

小澤 奈桜

私は小学三年生の時、生体の仕組みに魅せられました。生きている人の仕組みが精巧であること、進化を続けていることに感動しました。それから約十年、学習を重ねるごとに興味は増していき、好きなことを学んで仕事にできればと進路を看護学部で決定し、現在に至ります。進化し続ける技術によって、身近なスマートフォンを使って3D映像を見ることもできるようになっています。しかし、実際の人体を再現するには限りがあります。ずっと、実際の身体の仕組みを立体でみて、触れたいと思っていました。そして今回、見学の機会をいただき、実際に見て触れることができ、それはとても印象的で、忘れることはないと思いました。各先生方のお身体は少しずつ特徴が違いました。それは生前の生き方が表されており、それぞれの人生を全うされていたのだと実感しました。

これは、これから行う治療やケアの中で、生命力を無駄に消耗させないように注意し、より効率的な回復を考えることにつながります。大げさに言えば、救える命が増えたとすらいえると思います。私はこれまで、献血や臓器提供については存じ上げており、検討をしたこともありましたが、恥ずかしながら、今までの人生で献血という単語を聞くことも、それについて考えることもなかったように思います。今回の解剖見学は、献体について学び、考えるきっかけになりました。そこには知らないことが沢山ありました。しばらくご遺族のもとに帰れないこと、家族や兄弟など多くの人の同意を得ることなど、実際に献体に至るまでには数々の困難があることがわかりました。ご本人の「役に立ちたい」という思いには感謝しかありません。尊敬もしています。しかし私はそれ以上に、残されたご家族の方々が承認してくださったことにとっても感謝の念を覚えました。大切な家族がなくなり、悲しみに暮れる中、気持ちの整理がつく前に別れの時がやってきてしまう。それでも、ご本人の死生観を最期まで尊重し、医学界の役に立てるなら……そういった考えをお持ちの方がいらっしやること、その事実を胸に学習していかなければと胸が引き締ま

る思いでした。

白菊会の会報を読み、会員の方々の声を聴く中で、印象的な言葉がありました。それは、医師・看護師とのふれあいの中で献体を希望するようになった、といった内容のものです。過去に我々と同様に先生方から学んだ医師・看護師の方々の姿勢が、新たな先生を生んでいる。循環しているのだと思いました。私も今回の感謝を忘れず、将来的には、次世代の学生たちの学習につなげられるような医療を展開していきたいと思いました。

今回の解剖見学の時間を実りあるものにできるよう、看護学生としての自覚を持ち、精進してまいります。先生方、並びにそのご遺族の方々、本当にありがとうございます。ご冥福をお祈り申し上げます。

## 解剖見学を通して学んだこと

高久 唯衣

白菊会の皆様、この度は解剖見学という貴重な学びの機会を提供していただきありがとうございます。解剖見学を行う前は、「解剖」がどのようなものかというはつきりとしたイメージをもっていなかったため、解剖見学を行うことに対

して不安感があつたと同時にとても緊張していました。しかし、解剖見学で実際に臓器や筋肉などを自分の目で見たことで、多くの発見と学びを得ることができました。今回は、私が解剖見学を通して学んだことについて二つお話しさせていただきます。

一つ目は臓器や筋肉の位置や形、大きさについてです。解剖見学を行う前までは教科書に載っているような平面の図でしか体の中の臓器の配置を見たことがなく、うろ覚えの状態でした。しかし、解剖見学では体の中を立体的に見ることができ、「肺や横隔膜は思っていたよりも上にあるのだ」、「冠状動脈※は想像していたよりも細いのだ」、「肩甲骨あたりの筋肉はこの順番で重なっているのだ」など、多くの発見がありました。また、授業で食道は気管の真後ろに位置しているため、気管の前側には気管軟骨があるが、食道側にはないということを知りましたが、このことも今回の解剖見学で確認することができました。この他にも授業で得た知識と視覚によって得た知識が重なったことが多くあり、学びが深まりました。

二つ目は臨床で行う手技についてです。背中の筋肉についてのお話を聞いていた時に聴診三角について教えていただきました。

した。肩甲骨のあたりには僧帽筋、広背筋、大菱形筋で構成される聴診三角と言われる領域があり、この領域に聴診器をあてることで胸部に近い位置で呼吸音を聴くことができるということを知りました。少し前に呼吸器のアセスメント※の授業で呼吸音を聴く演習を行いました。その時には、どの位置に聴診器をあてれば呼吸音が聴けるのかということを理解しきれませんでした。しかし、今回の解剖見学でこのお話を聞いて、この場所で聴診を行う理由がすつと頭の中に入ってきました。また、神経についてのお話を聞いていた時に、臀部を四つの区画に分けた時に神経がたくさん通っている領域とあまり通っていない領域があり、神経があまり通っていない領域に筋肉内注射を打てばより安全に行うことができるというお話を聞きました。筋肉内注射の演習はまだ行ったことがなく、全く知識がなかったのですが、とても印象に残りました。今まで授業で様々な手技の演習を行ってきましたが、「なぜこのようにするのか」ということを考えず、ポイントをすべて知識として自分の頭に詰め込んでいるだけでした。しかし、解剖見学で筋肉や神経の位置を実際に見たことで、形態機能の知識と臨床で行う手技のポイントを結び付けることができました。解

剖見学が形態機能の知識から臨床で行う手技のポイントについて考えるきっかけとなりました。

最後に、私たちにこのような貴重な学びの機会を提供してくださったご遺体の先生方、本当にありがとうございました。献体してくださった先生方の思いを背負い、今回得た学びを今後の演習や実習に活かしていきたい、学びをさらに深めていきたいと思えます。そして、三年後に看護師として患者さんの看護をすることで先生方に恩返しをさせていただきます。

※冠状動脈……心臓の筋肉へ血液を供給する動脈

※アセスメント……本人が訴える症状と検査データ等を理論的に分析し、優先度をつけること

## 解剖見学での学びと

### これから

本間 菜々

この度は大変貴重な機会をいただきました。ありがとうございます。大変恥ずかしなから、正直申し上げますと、今回の解剖見学の話聞いて初めて、自分の意思に基づき、無条件・無報酬で提供する献体というものがあることを知りました。献

体という言葉聞いた当初は、普通だつたら亡くなってすぐに家族や大切な人に見送られながら葬式が行われ、火葬、埋葬されるのに、長い間火葬もできず、見ず知らずの人に身体をささげる献体を望むことが私には理解しがたいものだと思っていました。献体することに反対する家族も多いはず。それでも、家族を説得し、献体を希望するのはなぜなのかとも思っていました。しかし、見学前の先生の話や千葉白菊会の会報から、医療学生の学びや医学の発展のためにと強い願いをもって献体して下さっていることを知り、感謝の気持ちでいっぱいになるとともに、その尊い精神を、ご厚意を無駄にはしていけないと、これまで以上に真剣に解剖見学に臨みました。

解剖見学では、教科書では学ぶことのできないことをたくさん学ばせていただきました。私は平面の物を立体的にとらえることが苦手で、言葉では覚えていけるけれど、頭の中で想像できないという部分が多くありました。また、頭の中で立体的に思い浮かべることができないものほど記憶に残りにくく、いまだに理解できいていない構造もありました。しかし、実際に自分の目で見て、触れることで人体の構造を立体的にとらえるだけでなく、これまで別々に見てきた器官、骨格

筋、神経、血管を総合して捉えることができるようになりました。これまで看護において解剖学の重要性を理解できずにいましたが、看護では何よりも人体の構造を理解することが大切であると実感しました。各器官や骨格筋について理解していなければ適切なアセスメントを患者さんに行うことはできないし、血管や神経の走行について理解していなければ、麻痺などの原因となり、本来あるべきはずの力を失わせてしまうからです。これまでの授業で学んできた、やってはいけない行為、看護をするうえで気を付けるべきことはすべて人体の構造とつながっており、その意味を理解しながら看護することで初めて患者さんが安心・安全に受けられる看護になるのだと思いました。これからは、人体の構造と看護を結びつけて考え、行為一つ一つの意味を理解しながら学習していききたいと思いました。

今回私たちの先生となつてくださった方々からは、人体の構造についてだけではなく、看護的な視点、私たちの学びを心から願い、支えてくださる方がたくさんいること、献体という尊い精神などたくさんのお話を学ばせていただきました。また、看護学生としての、将来の医療従事者としての責任感が大きくなりました。

した。千葉大学に入学して一年が過ぎ、心のゆるみが出始め、最初のころよりも勉強がおろそかになっていました。しかし、今回の解剖見学を通して、このままではだめだと奮起させられました。今回献体して下さった方々はずっと私の心の中に生き続け、私の看護の道への活力となります。献体は、その人の生きた証にもなるのではないかと思います。このご恩は、この学びを生かしてさらに学びを深め、看護職者として患者さんと向き合い、患者さんに適切なアセスメントをして初めて返していけるものだと思います。このような貴重な時間をいただいたことに感謝の気持ちを忘れず、将来よい看護ができるように努力し続けたいと思います。本当にありがとうございます。



## ご遺族様からの メッセージ

和田 久子様

今まで自分の身内には献体した人は一人もいないという環境でしたので、まさか夫が献体を申し出るということは想定外のことでした。肺がんステージ4の診断を受けて一年の命だと宣告されましたが、主治医の先生方のご尽力もあり八年も生きさせて頂き、日々感謝の闘病生活を送っておりました。闘病四年目を過ぎたあたりから自分をここまで生きさせていただいた事に感謝の気持ちを何らかの形で表したい、後に続く患者さんの為に少しでも役に立ちたいという気持ちが芽生えてきたようでした。ちょうどその時、長女が妊娠25週で早産し、私たちの初孫が780グラムで産まれました。そしてその子が生死の境を乗り越え、元気にすくすく育ってくれました。

医学の進歩と医療従事者の方々の献身的な看護を賜り、感謝の念に堪えません。その事が主人の背中を決定的に押しした

でした。主人の気持ちが確固たるものだったので、私たち家族も本人の意思を尊重することにしました。妻である私にとつて、遺骨がすぐに戻ってこないという事に戸惑い、少し複雑な心境でしたが、今となればこうして無事にお役目を終えて戻ってくる主人をととても誇らしく思っています。遺骨が返還された後、しばらくの間、遺骨を前に在りし日の主人を偲び、心から冥福をお祈りしたいと思えます。



大矢 雅子様

叔父から、二十年前に自分はたくさん病気をしたから、亡くなった後今後の医療の役に立ちたいから献体をしたい、と話がありました。



姪である私に、その時は全てを託したい……と伝えられ、その時に「いいよ」と伝えましたが、実際この二年間、叔父が帰ってくるのを待つ日々の中で、亡くなってなお誰かの為に、未来の為に自身を提供したいと思った叔父を心からすごいと思ったし、こういう人生の締めくくり方があるんだと、改めて教えてもらうことができました。

私自身、自分自身も献体に今申し込みをしようとしています。

夫や子供達も賛成してくれていて、こういう活動がこれからも続いていく事が、未来の医療に少しでも貢献になっていければと思っています。



上野 悦男様

母の家は私の家から歩いて数分の距離です。私や妻、子供たちはちよくちよく母のところ顔を出していました。ある時、母が白菊会の話を私たちにしました。

私たちは適当に相槌を打ち、聞き流しておりました。母から、「どうせ死んだら焼かれて灰になるより、役立つほうが良いじゃない、アイバンクにも角膜を提供し、目が見えるようになれば良いじゃない」と聞かされました。その時はそうだねと言いつつ、話は終わりました。しばらくして母のところに行くと、白菊会入会の用紙やアイバンク入会の用紙があり、驚きました。電話しかすることが出来ない母が自力でそういうものを集めたので驚きました。それらに署名するように言われましたが、姉の了解なく署名は出来ないとその場はいったん話を収め、姉と連絡を取りました。姉も献体やアイバンクの話は聞いていたようで、本気だったんだと驚いていました。

私は以前、生体肝移植を受けました。姉をドナーとして手術は成功し、19年がたちます。医療には感謝しており、母の

申し出にも医学のためなら母と同じ想いでした。姉と私とで署名を行い、母は入会することが出来ました。

母が施設に入り、不謹慎ですが、母亡き後のことも考えるようになりました。葬儀やその後の手続きをどうしたらいいのか、ネットで調べたりしました。コロナのため施設に行っても顔を会わすことが出来ず、お互いに寂しい思いをいたしました。誤嚥性肺炎で入院することになり、入院当日は会うことが出来ましたが、寝ている姿を見るだけでした。一ヶ月ほど母も頑張りましたが、ついにその日を迎えました。コロナで会話もできず、別れがきてしまいました。

悲しみにひたる間もなく、アイバンクと白菊会に連絡を入れ、葬儀会社にも併せて連絡を入れました。通夜式と告別式をやりたく、姉家族と私の家族で式を執り行いました。亡くなった当日、千葉大の眼科の先生が処置をされ、片目を摘出されました。病院の看護師さんも初めての経験であったようで、母を褒めてくださいました。告別式後に火葬場に行くところ、大学に搬送され、そこでお別れと

なりました。火葬場に行かずに終わったため、まだ本当に亡くなったという実感は湧きませんでした。

アイバンク協会から後日連絡をいただき、母の角膜は移植され、患者の方は経過良好と伺い、母の一部はまだ生きて頑張っていると同時に、母の思いが実現され、感無量の思いでした。献体もこの度終わりましたので、母が生前話していたとおりに医学に多少なりとも貢献が出来たことを位牌に報告いたしました。父と同じ墓に埋葬できるので、家族としては一区切りがつくと思っております。

白菊会や千葉大学医学部の方々に感謝申し上げます。ありがとうございます。ありがとうございました。



解剖実習ガイダンス



午前中、遠隔授業による講義が行われ、午後からいよいよ実習です。

白菊会活動報告

令和四年十月五日(水)より、令和四年度の肉眼解剖学実習が始まりました。解剖に臨む医学部二年生たちを前に、大澤会長が「無条件・無報酬」の献体精神について語りました。そして年が明けた一月二十五日(水)、長かった解剖実習が終わり、医学部学生たちによるご遺体の納棺が行われました。献体の碑には鎮魂の花が捧げられ、白菊会役員も参列して黙祷を捧げました。

献花式



納棺式



解剖実習の最終日、学生たちの手でご遺体がお棺に納められ、花束が捧げられました。解剖実習がすべて終了した後、「献体の碑」前に皆集まってご遺体の先生へ感謝しました。

第13回白衣式 令和4年11月22日(火)開催



これから臨床実習に臨む医学部学生に白衣を贈る白衣式に、千葉白菊会の大澤会長が出席し、学生たちの前途を祝福、激励しました。





1. 転居された場合は、必ず千葉白菊会までお知らせください。毎年、住所不明の方が多数出て困っております。万一の時の連絡者の方に変更があった場合も同様です。

電話 043-226-2988 (月～金の9時から16時まで)

メール shiragiku@chiba-u.jp

手紙 〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1 千葉大学医学部内

いずれの方法でも結構ですので、お願いいたします。

2. 「2024年版献体手帳」の在庫がまだあります。ご希望の方は、登録番号 氏名 住所 をお知らせください。なお、在庫が無くなり次第、発送を終了いたします。

## 千葉大学医学部では 献体登録者を募集しています！

医学生たちに人体の構造を学ばせるための正常解剖  
医師が手技や詳細な解剖を学ぶサージカル・トレーニング  
医学者が解明する解剖研究や人体にフィットする医療機器開発  
医学の発展のために必要な解剖用献体は、まだまだ不足しています。  
献体に興味がある方は、千葉白菊会まで  
お問合せください。

千葉白菊会ホームページ

<https://www.m.chiba-u.jp/dept/shiragikukai/>



社会への恩返し 次世代への贈り物  
**献体**  
あなたの献体は、医学生の解剖実習や医師の教育・研究に用いられます  
あなたも献体しませんか?  
千葉大学医学部・千葉白菊会  
〒260-0856 千葉市中央区亥鼻1-8-1  
TEL:043-226-2988

# 白菊の広場

## 一 私と献体 一

令和四年度に入会された方は七十一名。その方たちの中から、入会の決意表明をご紹介します。

### ◆人生の最終目標

千葉市稲毛区 今井 加津子様

数年前にお世話になった高齢の知人が亡くなり、死後献体をされたことを知り、私自身、人生の最期に誰かの、何かのお役に立てたら有難いことと思っていましたので、献体を決意しました。これからの医療の進歩、医師の育成等に役立ててほしいです。

登録申込により、最終目標が出来たように思います。あらためて自分自身に与えられている命を意識して、生かされているこの時を大切にしなければならぬと思います。

### ◆三年間待ちました

千葉市美浜区 青木 裕子様

三年前、医療系の専門学校に通う娘から白菊会の存在を聞き、興味を持ちました。早速、資料を頂きましたが、入会は六十歳からと知り、三年待つて今回入会を希望します。

ひとは心臓が停止し、死亡が確認されたら火葬を待つのが通例ですが……肉体が必要とし、後世の医療や医学に役に立つのであれば、喜んで提供します。

## 一 会員からのお便り 一

会員の方からのお便りです。

千葉市花見川区 濱辺 ますみ様

秋が深まり、寒さを感じるこの頃です。会報の「成願者名簿」を拝見すると「おめでとうございます」と言ってしまうます。感染症にも事故にも会わず成願できることは、本当に素晴らしいこと。自分もそうありたいものと、願っております。

寒さに向かいます。皆様にはどうぞお元気で。

かしこ

令和四年十一月

いすみ市 所 久子様

医は仁術 幾百人の病む人を

命助けて神より尊し

皆様の御健康をお祈り致します

令和五年二月三日 立春

### ◆若き想い出

習志野市 野尻 美代子様

私は若い頃、白菊会の献体される方達の遺稿集をタイプライターで打ち込みながら、このような社会もあるんだと、崇高な気持ちで一文字一文字を誤字のないよう打ち上げたことがよみがえって来ました。八十六才になり、未来ある若者達にドクターを目指して頑張つてと、献体を決意しました。私は献体の二字を今まで保ち続けて、念願が叶った事を大変嬉しく思っています。

合掌

令和五年三月

ご主人様ご逝去に際して

追憶

酒田 ゆり

樹々の葉が

恥じらうように 戸惑いながら

色付き始める頃になると

私は 真つ白な晒さらしを一反 買い求める

それを 三十年間 繰り返した

昭和十五年一月二十六日

農家の三男坊として生まれた夫は

二十歳はたちで仕事先の新潟県の山奥で

乗っていた車が対向車とすれ違いざま

脱輪 崖下に落ちた 死亡者 一名

軽傷者 一名 重傷者 一名

それは悲惨な交通事故として

当時の新聞に掲載された

夫は その時から

下肢不自由 脊髄損傷となった

一ヶ月の命と言われたが

奇跡的に助かった

生涯 車椅子生活を余儀なくされた

まさに 人生これからの時だった

「俺は半分 死んでいる」

その言葉の通り麻痺して感覚の無いはずの

両脚の痛みや痺れが時折、襲ってくる

その恐怖から少しでも早く逃れるため

家の中の至る所に痛み止めは

山の様に積み重ねてあった

ゆく先々で痛みが来たら用量用法

関係なく薬に依存していた

「俺は お前に依存症」

サラつと言って流す

そんな夫の愛用する下着は

使い勝手の良い昔ながらのふんどし 褌

寝間着は浴衣を着用していた

少しでも気分よく過ごせるように

新しい晒にハサミを入れ

一針 一針 心を込めて縫った

今年怪我をしてから六十二年

毎日が褥瘡と排泄障害との闘いだっただ

与えられた命も限界にきて 最後は

朝晩 治療していたにもかかわらず

治りの悪い褥瘡が命取りとなり

作ったばかりの真つ白な

禪七枚は着用する主を失った

強い精神力を持った男の意地は

車椅子バスケットに汗を流し

車で日本中を走り周り

読書 音楽を趣味にして

選んだ仕事は製図業 トレーサー

昼夜逆転で打ち込んだ

パソコン等にも積極的に挑戦して

時代の流れを楽しんで

飼ったウサギとチワワを可愛がった

共に寄り添い 過ごした三十年

お互いに

「悔いのない人生を送ろう」と

好きな時に食事して

常に自分のペースで過ごした

与えられた八十二年の生涯を

精一杯生き抜き

令和四年十月二十七日

痛みから解放され

自由の身となった

兼ねてより入会していた

千葉大学 白菊会にて

献体の成願を待ち望んでいる



できるだけ早いご遺体の移送をお願いしております。御通夜・告別式などは3日間以内を目途にお考えください。

**Q** 献体をするときのご遺体に何を着せたらいいですか？また、棺は必要ですか？

**A** 特に決まりはございませんので、普段の寝間着等でお送りください。お棺はご準備いただいても、移送の際お引き取り出来ませんので必要ございません。

**Q** 献体後、遺体との対面は可能ですか？

**A** 申し訳ありませんが、大学への移送後にご遠慮頂いております。

**Q** 遺骨が返還されるまでの期間はどれくらいですか？

**A** ご遺体をお預かりしてからおよそ2～3年、お待ちいただいております。ただし、解剖の目的によっては、1年前後で解剖が終了することもあります。ご遺骨は、千葉大学の「解剖慰霊祭」におけるご遺骨返還式にてお返しいたします。解剖終了後、ご遺骨返還の目途がつきましたら大学より連絡いたしますので、慰霊祭前のご返還も可能です。

**Q** 大学まで遺骨を引き取りに行くことが困難なのですが。

**A** ご遺骨は、日本郵便のゆうパックでのみ郵送が可能です。ご依頼いただければ郵送いたしますので、千葉大学亥鼻地区事務部総務課総務第一係（043-222-7171 内線5017）までご連絡ください。

**Q** 献体後、遺骨を大学ですずっと預かってもらえますか？

**A** ご遺骨の保管場所がないため、必ず返還させていただきます。

**Q** 遺骨を灰にして返してもらえませんか？

**A** ご遺体は火葬後千葉市斎場の取り決めにより、ご遺骨の状態にてお返ししております。一度骨壺（高さ24.5cm×幅21.0cm）に納骨されたご遺骨を、あらためて粉骨作業を行って散骨などをする葬儀社もごございますので、そういった葬儀社へご相談ください。

**Q** 返還される遺骨に他人の遺骨が混じることはありませんか？

**A** 解剖実習は初めから終わりまで同じご遺体を同じ学生が担当し、他のご遺体と混ざることはありません。実習は指導教授のもとで終始真剣に整然と実施されており、学生の皆さんは感謝の念を込めて丁寧にご遺体に接しています。また、医師が解剖する場合においても、他のご遺体と混ざることは無いようなルールで実施しています。

解剖の終わったご遺体は一体毎にお棺に納められて火葬に付されますので、他のご遺骨が混ざることとは絶対に起こりません。どうかご安心ください。

**Q** 解剖後の供養はどうされていますか？

**A** 千葉大学医学部主催で、「解剖慰霊祭」が毎年6月頃に無宗教で実施されます。ご遺族の方々のほかに、千葉白菊会々員、医学部・附属病院等の関係職員、医学部・看護学部の学生等の参列のもと、一人ひとりが祭壇に白菊の花を捧げ霊を弔っております。また、千葉大学医学部の霊堂が千葉市の千葉寺にあり、毎年春秋の彼岸に医学部関係者や千葉白菊会役員等がお参りしています。

**Q** 献体登録者が旅先や県外の病院で死亡した場合、献体できますか？

**A** まずは千葉大学献体受付専用番号：043-226-2504（千葉大学医学部献体活動協力事業者 サンセルモ玉泉院）へご連絡ください。いつどこで天寿を全うされるか、誰にもわかりません。その意味からも、いつも献体登録証（小）をご携帯いただきたいと思います。

## 献体について (Q & A)

### 献体登録者からの質問 → 千葉大学亥鼻地区事務部総務課総務第一係 献体担当 (043-226-2988)

- Q** 住所や連絡者が変わったらどうすればよいですか？
- A** 住所だけでなく、電話番号や会員証(小)の裏面にある縁故者(連絡者)等の変更がある場合、できるだけ早く千葉大学亥鼻地区事務部総務課 総務第一係 献体担当 にご連絡下さい(043-226-2988 月～金 9時～16時※祝日は除く)。また、献体登録証を紛失された方も再発行いたしますのでご連絡ください。
- Q** 千葉県外へ転居したらどうなりますか？
- A** 千葉大学では、ご遺体のお迎え可能地域を千葉県内とさせていただいております。県外へ転居された場合は、千葉大学亥鼻地区事務部総務課 総務第一係 献体担当 へご連絡願います。登録の継続ができない場合は、登録取消のお手続き、あるいは転居先地域の献体登録団体の問い合わせ先をご案内いたします。また、県外の病院等でお亡くなりになった場合は、ご遺体のお迎えができない場合がございます。
- Q** 登録後、状況や心境の変化により登録を取り消すことができますか？
- A** もちろん、ご本人の意思により登録の取り消しは自由に出来ます。千葉大学亥鼻地区事務部総務課 総務第一係 献体担当 に取消願をご請求いただくか、氏名、献体登録番号、取消理由を記入し(書式は問いません)、献体登録証(小)を同封のうえ郵送にてお届けください。献体登録証紛失の場合は、紛失の旨ご記入いただければ結構です。なお、ご本人による書面での意思確認が必要なため、お電話のみでの受付はできません。

### ご家族からの質問 → 千葉大学亥鼻地区事務部総務課総務第一係 献体担当 (043-226-2988)

- Q** 献体登録者が死亡したとき、どうすればよいですか？
- A** まず、できるだけ早く千葉大学献体受付専用番号：043-226-2504(千葉大学医学部献体活動協力事業者 サンセルモ玉泉院)へ連絡してください。365日・24時間受付しております。ご連絡頂いた際に、お迎えの日時を相談いたします。
- Q** 遺体はいつまでに大学に引き渡せば良いですか？
- A** 早ければ早いほど内臓の保存が良い状態での解剖が可能になります。具体的には、死後48時間以内のご遺体が最も多くの目的の解剖に適しており、大部分の登録者がこの時間内に搬送されています。72時間(3日間)を超えると、解剖の目的がかなり制限されてきます。120時間(5日間)を超えた場合は、お引き受けをお断りさせていただく場合があります。なお、ドライアイスをお棺に入れる場合は、ドライアイスがご遺体に触れないようにお棺の四隅に置いて下さい。アイバンクに登録されている会員は、6時間以内の眼球剖出行為がありますからご注意ください。
- Q** 死亡したときの状態によって献体できなくなることがあると聞きましたが、どんな場合ですか？
- A** 交通事故や墜落事故等、内臓破裂や血管損傷にいたる事故死の場合は、腐敗防止処置ができないので献体はできません。死後、臓器提供をされた方も同様です。また、事件や変死の疑いがある場合の司法解剖、特殊な病気や病気の原因・進行状況等を調べるため病理解剖を受ける方は、いずれも献体はできません。
- Q** 葬儀やお別れ会などのセレモニーをしてから移送でも良いですか？
- A** セレモニーの開催は可能ですが、大学としては少しでも内臓の保存が良い状態で解剖を学ばせたいので、

# ご家族の方々へ

## 1. 献体発生時の電話連絡

献体登録者がお亡くなりになりましたら、まず下記電話番号にご一報ください。千葉大学・千葉白菊会への連絡は必要ありません。以下の内容をお知らせください。献体登録時にお渡ししている連絡用カード（ブルーカード）をお持ちの場合は、参考にしてください。葬儀・告別式を行う場合は、日取りが決まりましたら再度ご連絡をお願いいたします。

### 電話連絡先（365日・24時間対応）

千葉大学献体受付専用番号：043-226-2504

（千葉大学医学部献体活動協力事業者 サンセルモ玉泉院）

もしも電話がつながりにくい場合は 043-301-9000（サンセルモ玉泉院稲毛会館）  
050-2018-7168（サンセルモ玉泉院コールセンター直通）にお掛けください。

## 2. お知らせいただく内容

ご遺体を大学へお渡しいただく日時などについてお知らせください。

## 3. 献体手続きに必要な書類

- ①死亡診断書の写し……医師の死亡診断書をコピーしておいてください。（お迎えの際に必要なとなりますので必ずお迎えまでにご用意いただき提携の葬儀業者にお渡しください）
  - ②埋火葬許可証……市町村役場に医師の死亡診断書を添えて「死亡届」を提出すると交付されます。その際、火葬場所は「千葉市斎場」とご記入ください。
  - ③解剖に関する遺族の承諾書……献体お預かり後、郵送いたしますので、ご署名・捺印のうえご返送ください。返信用封筒を同封しますので、埋火葬許可証と一緒にご返送ください。
- <まとめ>①の書類はお迎え時に葬儀業者に手渡し。

②・③の書類は後日大学から返信用封筒が届いてから大学へ郵送。

### 注意事項

- ※ 亡くなられてからお迎えまで数日間あく場合は、ご遺体が傷まないようご配慮ください。お棺にドライアイスを入れる場合は、直接ご遺体に触れないようお棺の四隅に入れてください。
- ※ 事故死（交通事故、れき死、水死等）や自殺の場合は献体できません。その他、お体の状態により保管のための処置が困難な場合にも、献体できないことがあります。

ご不明の点がありましたら、千葉大学亥鼻地区事務部総務課総務第一係にお問合せください。

(043-222-7171 内線5017)

## アイバンクにも登録されている場合

- ※ 登録者が亡くなられた際には、なるべく早く、まずアイバンク協会にご連絡ください。  
平日9時～17時 043-222-6803  
土日祝日夜間 043-222-7171 ※電話交換手に「献眼を行います」とお伝えください。

その際、アイバンク協会に献体登録者であることを合わせてお伝えください。

（献体登録者はアイバンクへの提供は片目だけになります。）

その他、アイバンクに関する詳細は、アイバンク協会にお問合せください。

アイバンク協会への連絡後、あらためて大学へ献体の電話連絡をお願いいたします。